

創立90周年自由学園美術工芸教育発表会 「幼児から大学生まで生活が育む感性の彩り」

全体リーダー 山下美記

第30回となる節目の美術工芸展を美術教育発表会として学園を挙げて行った。「幼児から大学生まで生活が育む感性の彩り」と称して学園の美術の全てを発表することになった。今回の美術教育発表会については、パンフレットに紹介された矢野学園長と美術工芸教育顧問 滝沢具幸先生お二人の言葉に集約されている。その中から紹介する。

『自由学園の人間教育にとって美術工芸教育の果たす役割は大きなものです。今回は、作品展示と共に、「報告・講演会」を開催します。また、この機会に90年の歴史を「アーカイブズ展示」としてまとめています。

私たちは「本物」を大切にしたい創立者の思いを受け継ぎ、現在も第一線で活躍されている画家、彫刻家などの先生方にご指導いただいています。単なる技術の修得や上達を目指すのではなく、「生活即教育」の共に学ぶ生活を励みながら、感性を育み、表現することによって、感動を互いに共有し、目には見えない霊性（たましい）の成長につながることを願っています。

学園長 矢野恭弘先生の言葉より抜粋

『数年に一度開かれてきた美術工芸展は、今回は学園の教育や生活との係わりを通して美術教育の成果を発表する「美術工芸教育発表会」として展示を見ていただくことになりました。

美術を人間教育のひとつの柱とした創立者の想いは、自然やさまざまな物の中に美しさを発見し育て、そうして養われた心をもって生活の中に表現できるよう働きかけてゆくということでした。

自然豊かな学園での生活で育まれた心と感性は、今ここに創造の喜びの合唱となって会場に溢れることでしょう。

幼児生活団から最高学部までの一貫した教育による美術の取り組みが、それぞれの年代でどのように成長し、発展してゆか、ご覧いただければ幸いです。』

美術工芸教育顧問 滝沢具幸先生の言葉より抜粋

I. はじめに

前回（第29回）美術工芸展終了後から、美術部会では反省点を検証してきた。各部らしさは表現されたが一貫の繋がりが見えなかったということであった。幼児・子ども時代の勢いがどのように繋がっていくのか？そこでまず、各部の段階が見えるために、中心となるべき女子部の指導案を検証し体制を整えることで、全体の向上を図った。2009年4月より改定案を実践し、今回その成果を収めることができた。さらに、学園では当たり前に行われている学校生活や他教科との総合的な課題・領域横断的な研究課題などを積極的に行った。こうした取り組みから繋がりをより表現したいと

考えたのである。美術という教科は、人間形成の上においても、また自由学園の生活即教育という柱においても大切な役割を担っている。感性を豊かに育み、生活を彩るという全ての土台と繋がっていることを再認識したいと考えたのである。

II. 美術教育発表会としての準備

さらに今回は「美術教育発表会」として、美術教育という視点から作品展示、報告会などを行った。展示では、総合的な取り組みや領域横断的な研究を「つながる学び」として各会場の中で統一してロゴマークと共に発表した。このテーマを通して各年齢の段階を発表することにより美術教育の一

貫性を表現したいと考えた。

幼児生活団や初等部の段階では、新鮮な発見や驚きを直感的に扱い思い切り表現できるようにしている。中等科高等科の段階ではさらに学問として学び理解を深めると共に制作にも反映できるように展開して、構築できるようにしている。そして最終段階の最高学部では中等科高等科までの基礎力を活かし制作だけに留まらず共同研究として具現化している。多角的に捉え社会への働きかけとしても繋がっていくように企画し実践できるようにしている。今後の最高学部の美術の方向性とも合わせてもっと確立させていきたいと願っている。以上のように美術教育を通して、自由学園の人間教育の一端を発表したいと考え準備したのである。

Ⅲ. 美術教育発表会としての展示

滝沢先生の総評をまとめると下記のようにであった。幼児生活団(幼稚園)は、パステル調の明るい色彩で無邪気な作品が並んでいた。生活空間そのものが楽しそうでその環境の中で経験し表現すること、また、幼児・父母・指導者との連携を大切にしていることがよく分かった。

初等部(小学校)は、毎年校内展覧会を開催していることから会場構成が落ち着いており、展示作業も父母の協力によるところが大きい。作品は、テーマも豊富で元気があった。春の樹木や風景画は、のびのびと描けていた。物をうわべだけで捉えるのではなく、手の力をこめ驚きや実感と共に表現できていた。デザインの課題なども色が美しく多彩であった。一人ひとり違うのは、みんな違う感じ方ができているからであろう。生活、学び、表現が繋がっていると楽しく思っていた。女子部(女子中等科・高等科)は、会場に入ると染色の布が舞い、鳥が樹にとまり野菜や果物の暖かな作品が並んでいた。芝生には学園の木々で制作した動物たちが今にも動き出しそうに並べられていた。会場構成がよくずっとこの場にいたくなる展示であった。一方絵画などの平面の作品も力がついた。学園の本来大切にしてきたテーマに立ち返り重ねてきた取り組みが、作品の幅を広げた。男子部(男子中等科・高等科)に行くと、まず芝生の上のダイナミックな木の動物たちが眼に飛び込んでくる。一気に仕上げる活力はすごい。

底力もある。さらに落ち着いた勉強の中からもその力が発揮できるようになって欲しい。

最高学部(大学部)は、限られた時間の中でよくまとめていた。でももっと高度なところを目指しているはずである。美術大学ではない学部の美術として専門的に制作するだけでは物足りない。リベラルアーツとして人格形成の上に深く関わり一人の人として、また自由学園の一貫教育の最終段階として育てられなければいけない。そしてさらに社会へと繋がっていくような取り組みにしたい。

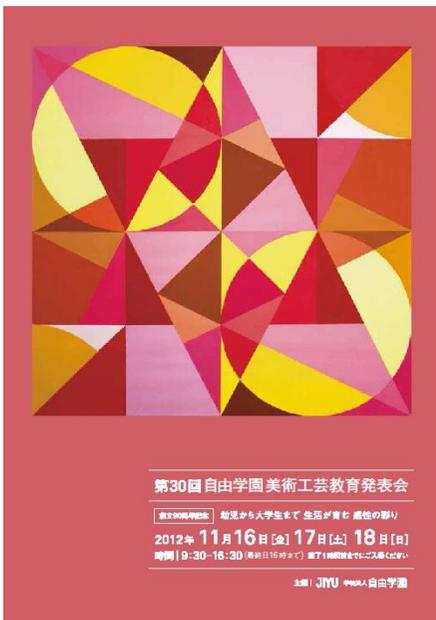
今回は入場無料とし学校を挙げて取り組んだ美術工芸教育発表会は、秋の学園に7500人の方々を迎えることができた。制作だけではなくこの会の運営は学生が中心に担った。その働きには眼を見張るものがある。総リーダーの最高学部生の下、女子部男子部リーダーを中心に約100人からなる組織を動かしていった。受付、広報、バリアフリーの準備、お茶のサービスまでこの会の企画や準備、実働まで、全体を把握しながら心を尽くす配慮も忘れず運営していた。全員参加がモットーの学園では、多方面で活躍できる場が与えられ、その責任を果すことでそれぞれが成長していく。

Ⅳ. 美術工芸教育発表会を終えて

今回は、これまでの展示に加えて教育発表という視点が強く打ち出され、改めて自由学園における美術教育の意義を問かける発表会となったのではないかと感じている。それは、アーカイブズ展示による美術教育の歴史でもよく分かる。しかし現状はどうか?日本の美術教育を支えた諸先輩方が自由学園の美術教育を創った。本当に活発に制作し表現してきたこれまでの伝統の上に、教育現場の現状も時代背景も環境も変化してきたのは学園とはいえ例外ではない。その上で、不偏ともいべき美術教育の意義を、もっともっと追求していかなくてはならない。体系や形ばかりが伝承されていくのではなく、人としての豊かな感性を彩っていく学びこそ真の教育であること、その一端を担っている美術であることを主張して、さらに努力していきたい。今回の美術教育発表会に向けて理事長・学園長をはじめたくさんの方々との議論を重ねてきた。最高学部美術の方針とその

体制、男子部（中等科・高等科）美術のカリキュラム再生など、まだ課題は山積している。ここからまた再スタートして自由学園の美術教育を進化させていきたいと願う。その意義を広く指し示すことができた美術展となったのではないかと痛感している。

＊ポスター・パンフレット
最高学部生の作品から



女子部生の作品から



＊正門モニュメント
男子部高等科3年 制作

